『ジェイン・エア』におけるエドワード・ロチェスターの「身体障害」

橋本　千春

序

本研究発表では、シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-55）の『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）において、身体障害者になった男性主人公エドワード・ロチェスター（Edward Rochester）の「男性性」に着目する。その際、彼のロマンティック・パートナーである女性主人公ジェイン・エア（Jane Eyre）との関係に目を向ける。そして、たびたび“reader”と呼びかけながら物語を展開する作者シャーロットが、ロチェスターをどのような男性として読者に提示していたのかについて考察する。考察方法は、19 世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギーを用い、ロチェスターの言動を 19 世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギーと比較する。そうすることで、先行研究では、バイロニック・ヒーローや青髭のような男性として認識されてきたロチェスターを、ここでは、それらとは異なる見解を提示する。

1.　19 世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギー

19 世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギーとは、男性は、社会と家庭で権威を持ち、女性は、家庭に留まり、社会で働く男性を癒し、慰めるというものである。ジョン・トッシュ（John Tosh）は、「男性性」に「自己主張の強さ」（“assertiveness”）、「勇気」（“courage”）、「自立」（“independence”）、「正直さ」（“straight-forwardness”）、「身体的強さ」（“physical strength”）、「運動能力」（“sporting ability”）、「女性たちを支配する力」（“power, especially power over women”）、「自制心」（“self-control”）、「一生懸命に働くこと」（“hard work”）、「攻撃的鋭さ」（“more aggressive edge”）等を挙げる（Tosh 1-34）。そして、「女性性」は、「男性らしさ」の反対にあるものとして、か弱さや、受動的であること、自己否定や、他者に依存して生きること等である。

財力もまた、当時「男性性」と結び付けられて認識されたものとされる。『ジェイン・エア』の出版と同じ年に出版されたアン・ブロンテ（Anne Brontë, 1820-49）の『アグネス・グレイ』（*Agnes Grey*, 1847）では、女性主人公アグネス・グレイ（Agnes Grey）の牧師（a clergyman）である父親が、家族に快適な暮らしをさせるために、貿易商人であった友人の資金不足援助と自らの資産を増やす目的で、わずかな世襲財産を友人の手に預けることが、第 1 章で描かれている。家族に少しでもよい暮らしをさせようと、家父長として財力を増やそうとするアグネスの父親の姿は、財力が「男性性」と結びついて認識されていたことを示すものである。

2.　エドワード・ロチェスターとジェイン・エアの関係

身体障害者になったロチェスターを介護するのは、物語の結末でロチェスターと結婚するジェインである。結末では、ロチェスターが、ジェインに「助けられる者」として、ジェインが、ロチェスターを「助ける者」として、描かれている。しかしながら、そのような彼らの関係は、身体障害者になる前のロチェスターが、ジェインと初めて出会う場面でも同じように描かれている。

強靭な肉体と高い運動能力を持つ身体障害者になる前のロチェスターは、女性たちに豪華な贈り物をしたり、家父長としての抑圧的言動の描写が目立つ。第 15 章では、ロチェスターは、フランス人の踊り子であるセリーヌ・ヴァランス（Céline Varens）を愛し、自らの金の力でセリーヌに住む場所や沢山の召使、馬車、カシミヤ、ダイヤモンド、レース等の豪華な品物を買い与えていることが描かれている。ロチェスターは、ある日、セリーヌが、自分が贈った豪華な贈り物を身に付けて、ロチェスターとは別の貴族の子爵（a vicomte）の男性と会っている現場を目撃する。すると、ロチェスターは、その子爵の男性に決闘を申し込み、翌朝の彼との決闘で、相手の片腕を負傷させている。ロチェスターが、自らの金の力で女性たちに豪華な贈り物をしたり、子爵の男性に決闘を申し込み、子爵の男性の片腕を負傷させるような男性になったのは、ロチェスターの発言によれば、「運命」によるものとされている。他方で、ロチェスターの心には、いまだ感じやすい部分が残されていることも描かれている。「運命」によってゴムボールのようになってしまったロチェスターの心が、もとの血と肉を持つ心に戻るのは、ロチェスターが身体障害者になってからである。

身体障害者になったロチェスターの言動には、負傷前とは異なる言動が描かれている。それは、虚栄心の消滅、過去の言動の反省、ゴムボールのようになってしまった心の回復、抑圧的言動の減少等である。第 37 章では、ロチェスターの狂女の妻バーサ・メイソン（Bertha Mason）が亡くなり、ロチェスターがジェインと法的に結婚することが可能となった時、ジェインとのその結婚式では、豪華な衣装や宝石を必要としていないことが描かれている。身体障害者になる前のロチェスターは、ジェインとの二重結婚を企む。ロチェスターは、ジェインが望んでいないのにもかかわらず、ロンドン（London）から高価なヴェールを取り寄せ、ジェインに贈っている。しかしながら、バーサが自殺し身体障害者に変化した後でジェインと結ばれる結婚式では、ロチェスターは、以前の結婚式の時とは異なり、豪華な衣装や宝石を必要としていないことが描かれている。加え

て、身体障害者になったロチェスターは、自分の過去の言動を反省し、これからは、今までとは違う生き方をすると述べている。身体障害者のロチェスターとジェインの結婚生活において、ロチェスターが、幸福であるのかという点については、描かれていないため不明である。読者は、ジェインの視点から語られる語りで、ロチェスターとジェインの結婚生活が、幸福であることを知る。火事でソーンフィールド屋敷（Thornfield Hall / mansion）を失ったロチェスターとは逆に、マデイラ島（Madeira）フンチャル（Funchal）で商業を営んでいたおじのジョン・エア（John Eyre, Esq）からの遺産を得、好奇心があり、自由であること、向上心や自立心があるジェインは、身体障害者になった夫ロチェスターと一緒にいても、1 人でいる時と同じように自由を感じ幸福であると語る。彼らの結婚生活は、マーガレット・ローズ・トレル（Margaret Rose Torrell）も指摘しているように、互いが互いを必要な時に頼るという相互依存の形が取られ、それは、つまり、身体障害者になった夫ロチェスターが、一方的に、妻ジェインを支配していないという権力の分散を意味している。視力と片腕を喪失し、夫になったロチェスターは、「運命」によってゴムボールのようになってしまった心を回復させ、妻ジェインの言動を尊重する“nonoppressive model of masculinity”(Torrell 90)な男性に変化したのである。

結論

ロチェスターの最初の妻バーサが起こした火事によって、身体障害者になりソーンフィールド屋敷も失ったロチェスターと、自立し、男女対等であるという思考と遺産も手に入れたジェインとの関係に注意を払い、身体障害者になったロチェスターの「男性性」を考察した。明らかになった点は、ジュディス・ハルバースタム（Judith Halberstam）が、“The male body is feminized when sick and the female body is masculinized when healthy, invigorated, and active”(Halberstam 354) と指摘しているように、身体障害者になったロチェスターは、象徴的意味で「女性らしく」なり、虚栄心が、消滅し、過去の言動を反省し、「運命」によってゴムボールのようになってしまった心を回復させ、ジェインを抑圧せず、ジェインの言動を尊重する男性に変化したことである。ロチェスターとジェインの結婚生活は、身体障害者である夫ロチェスターが家庭で権威を持ち、妻ジェインが、夫ロチェスターの庇護下にいるという点で、19 世紀の中産階級における「主流」のジェンダー・イデオロギーのステレオタイプの形である。しかしながら、作者シャーロットは、ロチェスターから視力と片腕を奪い、介護が必要な状態に置き換え、身体障害者の夫ロチェスターの代わりに妻ジェインをますます活動的に描き、彼らの結婚生活が、幸福であることをジェインに語らせる。

向上心や自立心があるロマンティック・パートナーとの関係において、相手の女性の言動を男性が持つ権威によって抑圧しない男性たちは、1880 年代から社会で可視化される。彼らは、「新しい男性」、“New Man”と呼ばれる。タラ・マクドナルド（Tara MacDonald）によれば、1880 年代から社会で可視化された「新しい男性」とは、同時代の 1880 年代に社会に現れた「新しい女性」、“New Woman”と呼ばれる女性との関係において、彼女の願いを容認するだけでなく助力もする男性であったとされている。「新しい男性」と呼ばれる男性の特徴には、「身体的強さ」（“physical strength”）や「攻撃性」（“aggressive”）というよりも、「思いやり」（“compassion”）や「癒し」（“healing”）等であることが、マクドナルドによって述べられている（MacDonald 1-23）。身体障害者になったロチェスターは、1880 年代から社会で可視化された「新しい女性」の特質を持つとされる妻ジェインを、結婚生活において抑圧せず、「思いやり」がある男性に変化したという点で、1880 年代から社会で可視化された「新しい男性」の特質を持つ男性であると捉えることが可能ではないだろうか。

主要参考文献

Brontë, Anne. *Agnes Grey*. 1847. Edited with an Introduction and Notes by Angeline Goreau. Penguin, 2004.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Edited with an Introduction and Notes by Stevie Davies. Penguin, 2006.

Halberstam, Judith. “The Good, The Bad, and The Ugly: Men, Women, and Masculinity.” *Masculinity Studies and Feminist Theory: New Directions*. Edited by Judith Kegan Gardiner. Columbia UP, 2002. pp. 344-67.

MacDonald, Tara. *The New Man, Masculinity and Marriage in the Victorian Novel.* Number 14. 2015. Routledge, 2019.

Patmore, Coventry. *Angel in the House*. Kessinger Publishing, 2004.

Ruskin, John. *Sesame and Lilies*. 1865. IndyPublish. com, n.d.

Torrell, Margaret Rose. “From India-Rubber Back to Flesh: A Reevaluation of Male Embodiment in *Jane Eyre*.” *The Mad Woman and the Blindman: Jane Eyre, Discourse, Disability*. Edited by David Bolt, Julia Miele Rodas, and Elizabeth J. Donaldson. The Ohaio State UP, 2012. pp. 71-90.

Tosh, John. *Manliness and Masculinities in Nineteenth-Century Britain: Essays on Gender, Family and Empire*. Pearson Longman, 2005.